

「英語落語」から日本人・日本文化を多面的に捉える
—非日本語専攻者対象の一般教養科目における実践から—

瀬尾匡輝（香港理工大学）

落語が「笑い」というユニバーサルな要素を含む話芸であることから（畑佐, 2010）、近年、落語を取り入れた日本語教育実践が盛んに行われるようになってきた（e.g. 入野, 2009; 畑佐・久保田, 2009）。筆者らは、単に言語の学習そのものを目的として落語を取り入れるのではなく、批判的思考能力の育成（楠見他, 2011）を目指した落語の導入ができないかと考え、香港の大学において落語を用いた実践を行った。本実践は、非日本語専攻者対象の一般教養科目で行われ、大学1年生 80 名が参加した。まず、全参加者が出席した 2 時間の講義で日本人落語家に落語の概要と落語の小噺を英語で紹介してもらい、その後、参加者たちはワークショップ形式で創作落語を実演した。そして翌日の授業で、参加者たちは 3 つのグループに分かれ、本校教師のファシリテーションのもと、講義を踏まえて日本文化の多様性・多面性について 1 時間のディスカッションを行った。本発表では、講義・ワークショップを行った落語家の内省と授業のフィールドノートデータをデータとし、学習者の日本文化に対する意識変化を分析した結果を報告する。

分析の結果、落語家は、授業実践前は、中国本土や香港の学習者に対して非積極的・非創造的であるというイメージを抱いていたが、授業を通して学習者へのイメージが変容していた。また、学習者も授業前には日本人に対して「真面目」「ユーモアがない」というイメージを持っていたが、演者や落語に現れる人間味溢れる人物に触れるなかで、日本人内の多様性を理解するようになった。しかし、その過程で「関西人だから」といったカテゴリー化による新たなステレオタイプを構築し、本質主義的な文化観から脱却しきれていないことが窺えた。以上の分析結果を踏まえて、本発表のまとめとして、日本伝統文化を授業で取り扱う際の注意点についても議論する。